

騎馬民族説の考古学的検討(要旨)

西谷, 正

<https://doi.org/10.15017/2235342>

出版情報 : 九州人類学会報. 11/12, pp.24-24, 1984-06-01. Kyushu Anthropological Association
バージョン :
権利関係 :

騎馬民族説の考古学的検討（要旨）

西谷 正

古代における日朝関係を考える重要な仮説の一つに、いわゆる騎馬民族説がある。1948年に、江上波夫氏が同説を提唱されていらいこんにちまでに、ひじょうに興味深い学説として論議を呼んできた。氏によると、3世紀の前半には北方から朝鮮半島を南下して狗邪地方を支配していた騎馬民族が、3世紀末から4世紀初にそこからさらに北部九州に渡って筑紫の地を征服したといわれる。そして、その騎馬民族は、北部九州に100年ほどとどまった後、近畿地方に進出し、強大な王権を樹立したとされる。このうちまず、紀元300年前後における加耶（加羅・任那）と筑紫を例にとり、考古学の立場から検討してみると、加耶では、慶尚南道の礼安里遺跡で土墳墓などの墳墓や陶質土器の実態が少しずつ解明されつつあるとはいえ、乗馬の風習とか騎馬民族王朝の存在を示すような考古学的証拠はまったく認められない。いっぽう、筑紫では、たとえば福岡県の原口古墳のように、堂々とした前方後円墳で、内部の粘土槨からは三角縁神獣鏡が出土している。現在、このような古墳文化を畿内型古墳と規定し、大和王権が筑紫を服属させ、支配していた物証と考えている。また、最近、筑紫の各地で庄内式土器という土師器が発見され、そこに畿内系土器の流入現象を認める。こうした状況は、騎馬民族が北部九州を支配していたという考え方を否定するものであろう。つぎに、紀元300年前後の時期における日朝交流の問題を考えると、宗像市の滝ヶ下遺跡で鉄素材である鉄鋌が検出されたことは注目される。しかし、これとて3世紀いらい北部九州と朝鮮南岸地域との間の単なる交易の結果もたらされたものとして位置づけるべきであろう。ところで、かつて小林行雄氏が指摘されていらい現在でも、日本において乗馬の風習が始まるのは、紀元400年前後のころからであり、それがしだいに普及するのは5世紀中葉以後のことであって、江上氏がいわれる300年前後における騎馬民族の渡来とは矛盾する。日本で最古時期の馬具のうち木心鉄張輪籠をみると、滋賀県新開古墳出土品と、釜山市福泉洞古墳群出土品とは確かに酷似する。福泉洞古墳群出土の馬甲もまた、和歌山県大谷古墳出土品に通じるものである。さらに、福岡県の池ノ上墳墓群から出土した初期須恵器は、洛東江下流域の加耶土器の系譜を引く。こうした考古学的諸事実は、加耶と北部九州もしくは近畿地方との密接な交流関係を物語るものではあっても、けっして騎馬民族の渡来や騎馬民族による征服を物語るものではない。いずれにしても、5世紀において、高句麗・新羅と、百済・加耶・倭という、対立する二つの大きな勢力圏のもとで、加耶とは友好・同盟の関係にあって、同じように農耕民族である日本の、北部九州や近畿地方に、加耶から乗馬の風習が伝来したということを示すにすぎないのである。